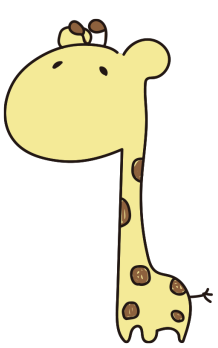
今月もお疲れ様でした。
コロナの感染を常に気にしながらの生活にも慣れてきたような気がしますが、やはり窮屈な思いは否めません。ご利用者様の日常にも大きく影響している状況ですが、なんとか「笑い」を巻き起こす楽しいイベントを考えたいなぁと思っているこの頃です。
今回は尊敬する鎌田實先生 (諏訪中央病院名誉院長) からのエピソードを下記に紹介いたします。

「つらい時、苦しい時こそ、ユーモアを！」

自分の生き方を笑いで包む「永六輔精神」

昔、友人の永六輔さんに、「永さんは『大往生』というベストセラーを書きましたが、ご自分ではどんな大往生を？」と聞いたことがあります。
「憧れは野垂れ死に。路傍に死体がうつ伏せに倒れていて、ひっくり返され、『これ、永六輔じゃないか？』『この顔の長さは、きっとそうだわ！』なんて、見つけてもらえると最高ですね！」という返事が。
さすが永六輔、自分自身の最後までギャグにしてしまう。「がん」の呼び方も、「がんと言うから怖がるんで、ぽんと呼んだらシリアスにならなくて済む」と、自分に巣くった癌をも茶化してしまう。
彼は一週間入院して人間ドックに入り、体重計にのったままではまではいいのですが、「痛いのは勘弁だな」と採血は拒否。胃カメラも「僕は胃カメラ飲まない会の会長してるからやらない」と、結局一週間入院して、測ったのは体重と血圧だけ。

亡くなって、「送る会」が開かれた時に、僕は娘さん達から弔辞を頼まれました。
「父はお別れの会でしんみりしてもらいたくないはず。だからできるだけ笑わせてください」と言うのでこの話をしたら、会場は笑いの渦。
永さんは、自分の生き方そのものをユーモアで捉え直した人、脱帽です。



ジョークやユーモアは、自分と周囲を元気にさせてくれます。
「ユーモア」と言う栄養素を日々取り入れていける生き方もまた素敵ですね。

追伸＞　早く皆さんとお腹の底から笑い合える親睦会のできる日を
キリンの様に、首をなが～くして待ちわびています。

2022 年 5 月 10 日　　呉　静恵